

佛法興隆の要道

大 森 禪 戒

一

隨聞記第二に「たとひ草菴樹下にもあれ法門の一句をも思量し一と時の坐禪をも行ぜんこそ、誠の佛法興隆にてあらめ」とある如く眞の佛教復興は佛祖の行履に隨順する人を打出することによつて初めて可能である。實に佛法の要諦は單なる理論には存しない。理論は他の理論によつて覆へされる時を豫想すべきである。正傳の佛法は生きた切なる體驗である。

體驗によつて築き上げられた人格こそ眞に價値あるものである。それは必らずしも多きを要しない。汾陽は僅かに六七人、藥山は十衆に満たなかつたではないか。併しこれでも叢林が盛んであつたといはれてゐるのである。決して衆の少きを憂へてはならない。我が正傳の佛法は時流を追はざる所に特色を持つてゐるのである。徒らに時機のみを顧慮して眞實の行道を忘れてはならない。佛祖の行履を信順するものは先づ名利希求の念を離るるを要する。名利の念は吾我の心から生ずる。されば「設ひ千經萬論を學し得たりとも我執を離れずんば終に魔坑に落つべし」と教へられてゐるのである。我執我欲は坐禪辨道によつて自ら離脱し得るのである。我々は當代下劣の人々に善しと言はれんよりは向後の賢者善人に嘖

はれないやうにしなければならぬ。従つてこの一擧手一投足も忽せにすべきではない。常に打成一片の志を以て生活するを要す。我が禪門の要道は大覺に基く眞實の行にあるのである。されば坐禪が其の中心生命である。之を忽せにするならば如何に理論は巧みであつても正傳の佛法を把握したとはいへないのである。正法眼藏三昧王三昧の卷に「驀然として盡界を超越して佛祖の屋裏に大尊貴生なるは結跏趺坐なり」と示されてゐる。參禪は正しく身心脫落である。結跏趺坐は三昧中の王三昧である。參禪辨道の志切なる者が一人でもよい。かかる人によつて佛法は興隆し禪門は復興するのである。

二

隨聞記第二に「有相著我の諸人あつまり學せんほどに、その中には一人も發心の人は出來るまじ。利養につき財欲にふけりて縦ひ千萬人集りたらんも、一人無からんに猶おとるべし。惡道の業因のみ自ら積て佛法の氣分なきゆへなり。もし清貧艱難にして或は乞食しあるひは果蓏等を食して、常に飢饉して學道せんに、是を聞て若し一人も來り學せんと思ふ人あらんこそ、誠の道心者、佛法興隆ならめとおぼゆれ」と示されてゐる。利養に奔り財欲を追ふ人の集ひは表面如何に旺んに見えても決して眞實の佛法に觸れたものではない。一箇半個でも清貧に甘んじ道を求むる心の切なる人があれば必ず眞箇の佛法を正傳する。佛教復興はかかる道心者によつてのみ成しとげられるのである。長阿含遊行經を見るに次の如き四種の沙門が擧げられてゐる。それは勝道・說道・活道・壞道の四種である。諸經要集にも述べられてゐる所で釋尊がかの梅壇樹茸を供養した周陀への說法内容である。是を讀んで我々は自らを深く反省しなければならぬと思ふ。所謂勝道

沙門とは「能く恩愛の刺を度し涅槃に入りて疑なく天人の路を超越す」とある如く殊勝の道法を得たる沙門をいふのである。一説には道によつて邪惡に勝てるものともされてゐる。何れにしても佛法興隆には缺くべからざる人である。次に說道（示道）沙門とは「善く第一義を解し道を説きて垢穢なく慈仁にして衆疑を決す」るものをいふ。是は單に自ら道を得るのみならず進んで社會民衆に正法を説き理想に導く人をいふのである。他に法を説示する者は自ら道を體得してゐなければならぬ。されば維摩經にも「若し自ら縛有つて能く彼の縛を解く。是の處有ることなし。若し自ら縛無くして能く彼の縛を解く。斯れ是の處有り」とある。

而して正法は求むる心切なる人によつてのみ眞實に把へられるのである。従つて禪門では道心者を求めて初めて正法を授けるのである。慧可禪師は自らの臂を斷つてまでも正法を求められたのである。さればこそ達磨大師の眞髓を得られたのである。說道の沙門は先づ對機の心を調へて法を授くるを要する。次に活道（命道）沙門とは「善く法句を敷演し道に依りて以て自ら生き遙かに無垢場を求む」と言はれてゐるやうに道法によつて生き佛道を生命とするものをいふ。所謂三學に生き六度の行を生命とする沙門である。蓋し正傳の佛法は我々の生命を動す根本的力である。隨聞記第六に「學道の人後は後日をまちて行道せんと思ふことなかれ。ただ今日今時をすさずして日々時々を勤むべきなり」と教へられてゐる。佛法のために己が生命を捨てる覺悟がなければならぬ。この覺悟なき者は眞實道に生くる人ではない。最後に壞道（汚道）沙門とは「内麤邪を懷き外像清白なるが如く虚誑にして誠實なし」とある如く破戒無慚にして聖道を汚し破るものをいふのである。内に麤邪の心ある人は多く外像溫和にして綺語を以て貴人に親近せんとする。巧言令色の者に仁慈の心あることは少い。併し人を見る明なき者は多く是に欺かれるのである。汚道壞法の沙門は決して沙門の名に値せざるも

のである。かかる沙門が如何に多く存しても佛法興隆には何の意義もなさないのである。否却つて佛教を衰頽に導くのみである。

三

其他四沙門又は四種僧として擧げられるものに有羞僧・無羞僧・啞羊僧・實僧等が存する。

有羞僧とは羞耻慚愧の心ある沙門をいふ。是は戒律を持つて破ることがないけれども未だ眞實なる佛法を把握せざるものである。次の無羞僧とは羞耻慚愧の念なき沙門である。是は破戒にして惡作佛法を毀つものをいふ。啞羊僧とは愚癡無智にして啞羊に均しき沙門を指す。緣起の理法を知らず中道眞如の諦理を辨へざる者であるから事に當つて決斷力なく解決力を缺くのである。最後に所謂實僧とは眞實に正法を體得したる沙門である。かかる沙門によつてのみ佛教は興隆するのである。辨道話に「しるべし。佛家には教の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばず。ただし修行の眞僞をしるべし」とある。教法の殊劣淺深を對論するは佛道の正行ではない。否かくの如きは單なる哲學の領域に屬する。それはものの部分的統一に終り我々の生命を動かす根本的統一とはならないのである。宗教は哲學の限界を出發點とする。殊に正傳の佛法は大修行を以てその中核とするのである。修行の眞僞によつてのみ佛法を體得したるか否かが決せられるのである。然らばその行は何を根本として働いてくるのであるか。それは正信を以て根源とする。佛法は正信の大機によつてのみ受授されるのである。然らば信の對象は何であるか。是を外にしては佛祖を内にしては自己の佛性を信するのである。この信現成の時佛祖初めて現成する。併し乍ら我々は佛祖を高きに見て徒らに自屈に陥り修行を廢してはならぬ。又内在

の佛性を誇つて上慢に流れ體驗を忽せにしてはならない。この自屈上慢を捨てて眞實に修行せば必らず得道するのである。かかる正信の大機によつてのみ佛法は興隆する。されば諸子は明日を期することなく今日今時ばかりと思ふて學道に心を入れねばならぬ。佛法の興隆宗門の復興は諸子の力に俟つこと大なりと言ふべきである。